

# 熊本城 復旧の歩み描く

## 中村さん 大学院修了制作にも



修了制作『夕刻に佇む』を前に、  
復興への思いを語る中村さん

この春、熊本市の崇城大学院芸術研究科を修了した中村妃菜さん(24)が、復旧が続く「熊本城」の姿などを通して、熊本地震からの復興の歩みを見つめている。修了制作にも熊本城の日本画を描いた中村さんは、「復旧工事が完了した後、取り戻した雄姿も描きたい」と力を込める。(葛谷晃一郎)

### 「被害忘れない」

## 熊本地震

日本画家の父、賢次さん(57)の影響で幼い頃から、絵画に親しんできた。崇城大で本格的に日本画を学び、岩絵の具の美しさに魅了された。

4年前の春、大学3年のときに熊本市東区の自宅で地震に遭った。自宅は、壁

にひびが入ったり、割れた食器や家具が散乱したりする被害を受け、近くの神社の駐車場で3日ほど、家族3人で車中泊をした。

約1週間後、2度の震度7の激しい揺れに見舞われた益城町を訪ねた。自宅から数キロしか離れていないが、道路は波打ち、住宅の多くがつぶれてしまっていた。

「なくなってしまうものを描き、地震の被害を忘れないようにしたい」

日本画のテーマに「熊本」を据えて描くようになり、この4年間で、被災地の様子に加え、夕暮れ時に市電に乗り込む人々など日常も描いた。大学院修了までに約20点を制作した。

地震から1年後、復旧工事が始まった熊本城の天守閣の被災した姿を描いた。その後、徐々に工事は進み、「復旧に少し近づいている様子」を表現した「い」と、修了制作にも熊本城を選んだ。まだ工事は

続いており、城の横にそびえるクレインのアームなどを丁寧に描き、約3か月がかりで完成。縦1.83、横4.86の大作で、2月下旬に県立美術館分館で開かれた修了展に出展した。

修了展には、自宅が被災したという人も訪れ、「復興が進んでいる感じが感じられて、感慨深いですね」といった感想が寄せられたという。

現在、非常勤講師として市立必由館高美術コースで勤める傍ら、日本画の制作を続けている。「これから熊本にしかない雰囲気を描き続けるとともに、新しいテーマにも挑戦したい」と話した。